

〔嬉遊笑覽器用〕まき車と云は、今のシャチ也。略○中思ふに車軸の略なるべし、そのかみ修羅と云しも、此の工にや、節用集に、修羅は、引大石材木也と注せり、又地車なども云しにや、石屋宗山が明曆火災記、戌年に御天主臺をほぐし、金銀の塊をシユラにのせ、五六百人にて引出すと見えたり、

〔本朝軍器考六器〕大友が家ノ事シルセル記ニ、天正四年ノ夏、宗麟入道ガ領セル肥後國ニ、南蕃ヨリ大ノ石火矢來レルヲ、入道ヤガテ彼ノ國ヨリ修羅ヲモテ、豊後ノ國臼杵ノ庄丹生ノ島迄引キヨセテ、悦ブコトカギリナク、其名ヲバ國崩トナン名ケル、

〔明良洪範二〕黒田長政ハ、關ヶ原ノ賞トシテ、大國ヲ賜ハリシカバ、其神恩ニ報ゼントテ、日光山ヘ石ノ大華表ヲ建立スベシトテ、筑前ヨリ大石數多運送スル、此事今マデ例ナキ事故、石工等モツケガハズ、マシテ町人ノ請合ト云事モナキ時節ユヘ、家臣等モ、イカヽアラント衆議決セズ、長政聞テ、オロカ成ル事ヲ申物哉、江戸ヨリハ石一本ヲ船一艘ニ乗セ、左右ニ大綱ヲ付、虚船コギナラベ、陸地ニハ修羅ヲ以テ、半數多カケテ、勞レザル様ニヒカスベシ、